

メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第一 2:17~20 「主イエスが再び来られるとき」

[17]「兄弟たちよ。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されたので——といっても、顔を見ないだけで、心においてではありませんが、——なおさらのこと、あなたがたの顔を見たいと切に願っていました」

パウロたちは使徒17:2によれば、テサロニケで三つの安息日にわたって福音を宣べ伝えた。しかし、ねたみにかられたユダヤ人たちの妨害によって彼らはテサロニケを去らなければならなかった。ここでパウロは「しばらくの間あなたがたから引き離された」と言っているが、「しばらくの間」とは、ほんの短期間という意味で期間の短さを強調している。「引き離された」は本来ひとつであるものを無理に引き裂かれたという意味で、次の「顔を見ないだけで、心においてではありませんが」ということばとともに、彼らとテサロニケ教会の人々との間に深く親しい交わりが存在したということをお知らせされる。しかも、その心の交わりが真実なものであればあるほど、身近にあって「顔を見たい」という願いが満ちあふれてくるのは極めて自然である。これらのことばから、パウロたちのテサロニケ人たちに対する深い愛がよく表わされていることがわかる。

[18]「それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました」

テサロニケへ戻れば迫害されていのちを落とすかもしれないのに、彼は熱心にそのことを願った。これはまだ信仰に入ったばかりの彼らを何とかして信仰に堅く立たせたい、成長させたい、欠けを補ってやりたいとの思いからである。→3:10

しかし、そこにサタンの妨げがあった。これが具体的にどのようなものであったかはわからないが、第一回伝道旅行の時にかかったマラリヤの後遺症による頭痛、発作、または体を不自由にする何かの病であったかもしれない。→Ⅱコリント12:7

あるいは、パウロが今滞在しているアテネまたはコリントで敵対者たちに足を引っ張られ妨害されていたのかもしれない。しかし、すべてのことにおいて神が絶対的主権を持っておられ、すべては神の摂理のうちに起こって来るのであり、サタンの活動も神の許容範囲においてのみのものである。→ヨブ記1~2章

私たちも信仰のゆえに様々な困難を受けることがあっても、それをいたずらに恐れたり、悲観することなくすべては神の御手に握られていることを信じ、またすべてのことを働かせて益としてくださる神を信じ、信仰に堅く立って歩むことが大切。→ローマ8:28、Ⅰペテロ5:8~11

[19-20]「私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです」

パウロはここでテサロニケ人たちの思いを、主イエス・キリストが再び来られる再臨のときに向けさせる。主イエスは一度目は救い主として私たちの罪を贖うため

に来られた。人としてこの世に来られ、十字架の死に至る苦難を受けられ、私たちの罪を贖われたのである。しかし、二度目は王の王、主の主として全世界を裁くために来られる。→黙示録1:7、22:12~13 この時こそすべての人間の人生の総決算になる。パウロたち福音の伝道者にとって、福音を聞いた人々がしっかりと信仰に立ってその一生を送り、最後に主イエス・キリストの御前で再会できるならば、それにまさる喜びはない。そのときに彼らが導いた人々は彼らの望み、喜び、誇りの冠となるのである。

ここで言われている「望み」は望みの源、根拠。「喜び」も喜びの根拠、原因のことを指す。「冠」は何かの競技で勝利を得た者に与えられる冠のことで勝利のしるしであり、キリストが与えてくださる豊かな報いを指す。20節の「誉れ」とは良い評判という意味。そしてここでも「喜び」に言及されている。

このように問いかけ、反復、断言することによってパウロたちが福音を宣べ伝えたテサロニケ人が、神の御前にいかにかげがえのない存在であるかということを教え、励ましている。彼らテサロニケ人たちもこの期待にこたえるように信仰を堅く保っていかなければならない。

私たちすべての信仰者もそれぞれの人生において出会う人々に機会をとらえて福音を伝え、やがて主イエス・キリストが再び来られるときに共に主を賛美し、喜ぶ者となることができるならばこれにまさる幸いはない。